

## ダンゴ虫見つけた！ 目黒区立ふどう幼稚園(東京都目黒区)

< 第二の園庭として活用している、自然環境豊かな隣接する公園(都立林試の森公園)での事例 >

### 事例1 見つけたい 5歳児(4月末)

「ねえ、ねえ、先生、ダンゴムシはどんなところにいるの？」と一人の幼児が保育者に聞きに来る。「木の根元とかによくいるんだけど・・・」と言うと、二人で木の根本のところの土をどけるようにして探す。すると、5mmぐらいの小さな粒から芽がでているのを発見する。「あっ、もやしの芽だ」と言い、その粒をつまんで、よく見るようにする。それを見てもう一人が「どんぐりにも芽がでるよ」という。「そうだ芽が出ているもの探しにいこう。」と二人は歩きはじめる。

<分析> ダンゴムシを見つけない、という目的をもって歩き始め、小さな新芽を見つけて、新しい発見を楽しんでいる。そのことが次の発見を楽しみたいという思いをひき出している。幼児は自分たちで発見した喜びを味わうと、そのことをきっかけにして、もっと見つけてみようとして動きをつくり出していく。このような動きがひき出されていく森の環境が、幼児の好奇心を豊かにしている。

### 事例2 ダンゴ虫さんまた来るね 5歳児(4月末)

「幼稚園に帰りませす」の声が聞こえる。A児が「まってー！」と言って木の根本へ走っていく。手に握っていた10匹ぐらいのダンゴ虫を根本に置き土をかぶせて「また、くるね」とダンゴ虫に声をかける。

<分析> 森で遊んだ楽しさを、また森に来る時までとっておこう、というように、ダンゴムシを木の根本に埋めている。命のあるものへの愛着を抱いている様子が分かる。



### 事例3 ダンゴムシのおふとん 4歳児・5歳児(5月)

切り株の上皮の中にダンゴムシが巣を作っている。5歳A児がそれを見て、「ダンゴムシかわいいでしょ」と4歳B児に語りかける。「お布団をかぶせようか」とA児が若い桜の葉をダンゴムシの上に乗せる。「枯れると食べられるけど枯れないときはおふとんになるよ」と言う。4歳B児が「黄色いてんてんのあるダンゴムシもいるね」と言うとA児が「女の子なんだよ、それ」と答える。B児が「あ、小さいの赤ちゃんなの？触ったことあるよ」と指で触りながら言う。ダンゴムシが丸まるのを見て「あ、かわいとき丸くなるんだね」と言いながら一緒に暫く、ながめている。

<分析> 繰り返し同じ拠点に行くことで、木の切り株の表皮にダンゴムシが住んでいることや、どんな実がどこに落ちているかなど次第にどこに何があるかが分かってくる。5歳児から4歳児へと遊びが伝承されていくことが楽しさを膨らませている。場や生き物について知っていることを伝えながら、5歳児としての自信と意識をもって行動し、4歳児は共に遊ぶことの喜びを味わいながら、小さな生き物や植物へ愛着をもっていく姿がみられる。



### 事例4 本当にダンゴムシ？ 5歳児(10月)

A児が1匹のワラジムシを捕まえて保育者のところに来る。「ダンゴムシ相撲をしよう」と提案する。保育者のもつダンゴムシはすぐ丸まってしまい動かない。B児が「先生のダンゴムシ寝てるんじゃない？」と言う。「Aちゃんのダンゴムシは元気で丸まらないね」と保育者が言うと「丸まるよ」と手で丸めてみるが、すぐにまっすぐに戻ってしまう。「あれ？変」何度やっても保育者のダンゴムシは伸ばしても丸まり、A児のダンゴムシ(ワラジムシ)は手で丸めても、伸びてしまう。2人は不思議そうにひっくり返したり、近くで見たりしながら、何度か繰り返す。「これ本当にダンゴムシかな？」と保育者が言い、図鑑で調べてみることになる。

<分析> いつもの遊びを繰り返しながら気付きを友達と伝え合い、そのことを確かめたり試したりしながら、遊びを展開している。不思議だと感じて試しながら発見の喜びを保育者や友達と共有している。

### みどころ

ダンゴ虫は子どもたちの大切な自然の教材であることが、この事例からよく分かります。ダンゴ虫を見つけないという思いで散策する姿、もう園に戻るといふ時ダンゴ虫を思いやり別れを惜しむ姿、小さなダンゴ虫に愛着をもって遭遇した4、5歳児が互いに気付いたことや知っていることを言いかわりを楽しむ姿、保育者が子どもの発想や遊びを受け止めて不思議に思うきっかけを作ったことで気付きや疑問が引き出され追求につながった姿など、どの姿からも、「科学する心」が育まれるような子どもたちの心の動きを捉えることができます。